

阿弥陀さまをおがむ子どもを育てる

阿弥陀さまはいつでもどこでもそばにいてくださることを知る。



私たちは「阿弥陀さまをおがむ子どもを育てる」という願いをもって保育を行っています。この保育目標は、単に、形だけ手を合わせることをめざしているものではありません。手を合わせお念仏を言えればいいというものでもありません。ではどういふことなのでしょう。

この保育目標には保育を行う上でのより具体的な視点として4つのねらいが設けられています。その中に、「阿弥陀さまはいつでもどこでもそばにいてくださることを知る」というものがあります。この視点から少し考えてみたいと思います。

わたしの園でよく歌う仏教讃歌に「しっている」という曲があります。

ののさまは 口ではなんにもいわないが
ぼくのしたこと 知っている 知っている

ののさまは 口ではなんにもいわないが
あなたのしたこと 知っている 知っている

ののさま(ほとけさま)は口では何も言わず、しゃべったりしないのだけれども、いつでも私たちを見守ってくれているという歌詞の短い歌です。

とかく現代に生きる私たちは、目に見えるもの、形として残る物に執着し、目に見えないものをおろそかにしがちです。しかし、当然のことですが、目に見えないものにもたいせつなものがたくさんあります。例えば、人の「気持ち」や「心」は目には見えませんが、私たちを支える大切なものです。また私たちを陰日なで支えてくれたものを表す「おかげ」や「恩」も形としては見えませんが欠くことができないものです。阿弥陀さまの働きも同様です。口ではなにも言わず、直接何かをしてくれるわけではありませんが、私たちのことをいつでも見守り、私たちに働きかけてくださっています。しかしながらその働きに気づけないのが私たち人間です。だからこそ、仏さまの話を聞き(聴聞)、手を合わせ向き合っていくことが大切なのではないでしょうか。そうすることで、目には見えないものや働きを感じていくことができるのではないのでしょうか。言い換えれば、阿弥陀さまをおがむということは、阿弥陀さまの働きを始めとした目に見えない様々な働きを感じていくと言ふことではないのでしょうか。

阿弥陀さまをおがむということは、単に、手を合わせおがむということではなく、阿弥陀さまの働きにあうことです。そこには自らを振り返る心が生まれます。そして私たちが生きていく中で当たり前だと思っていることが、当たり前ではないことに気づかされ、多くのものや人に支えられているということを改めて知らされることもあります。そこからは「ありがたい」「もったいない」という大切な心が生まれてくるのではないのでしょうか。子どもたちには、そんな心を持ち、より豊かな人生を歩んでいって欲しいと願っています。

まことの保育の願い

伊藤唯道 合掌